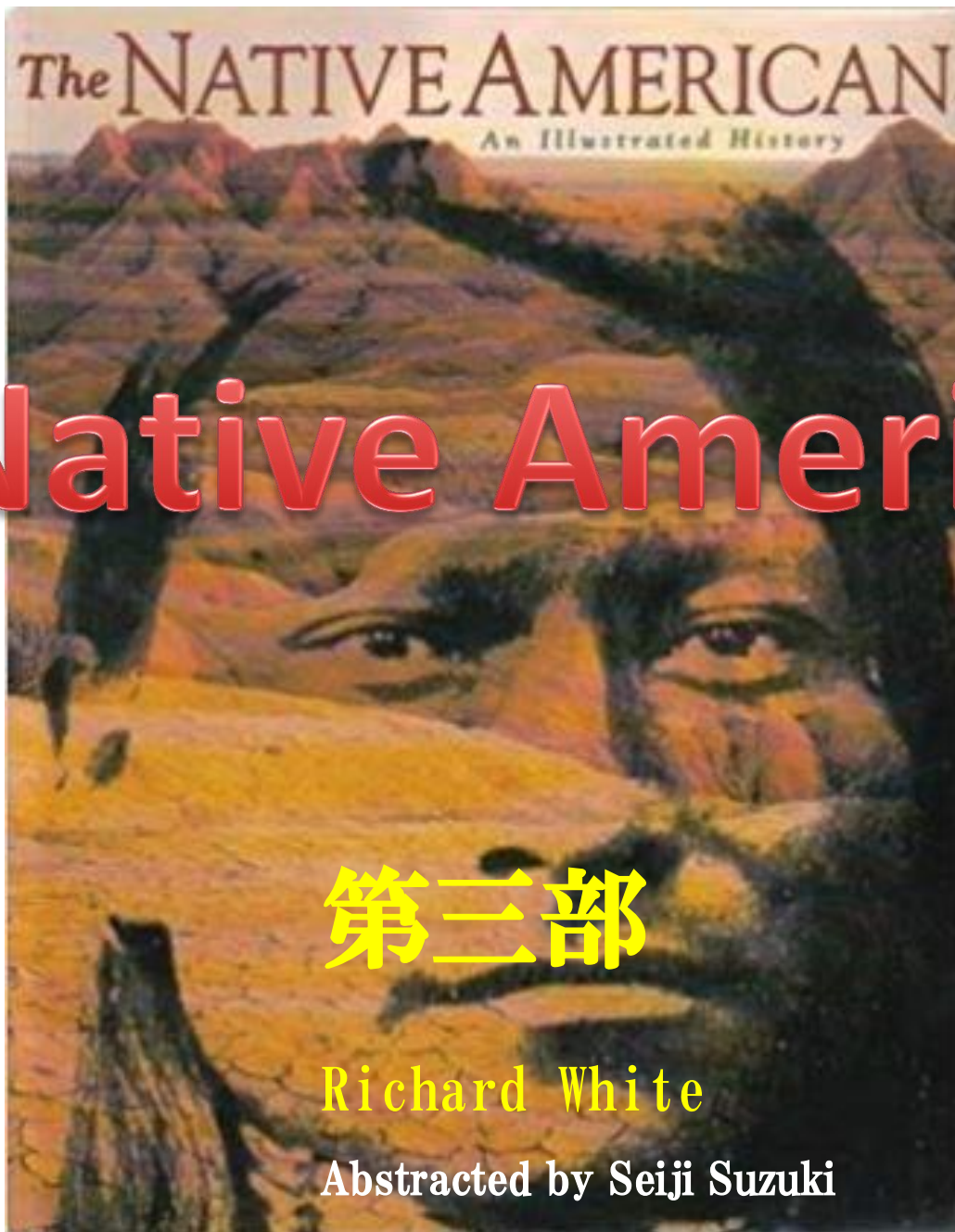
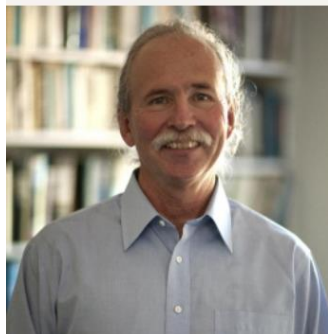




The Native American





Blackfeetの埋葬用の祭壇 (1912)

EXPANSION AND EXODUS

拡大と退去

兄弟たちよー私の人達は平和を望んでいる；

赤い者はみんな平和を望んでいる；だが、白人たちのいるところには、我々の母の胸にあるものを除き、彼らには平和などないのだ。

TECUMEH, SHAWNEE, ca, 1811

CHAPTER 13

世界全体
をもう一度
作る事

彼ら自身の先祖
により引き継がれ
てきたもの以上
に伝統というもの
になる様なものを
造りだしてきた。

CHAPTER 14

毛皮、バッ
ファロー、そ
して 交易

それらは、イ
ギリス人なし
では生活でき
ないことを認
めなくてもな
らない。”

CHAPTER 15

相手の思惑
次第の均衡

18世紀における
北アメリカの重要
な地域全体に渡
り出現した、イン
ディアン達と白人
たちとの間の文
化的な適合が
あった

CHAPTER 16

血を流す
こと

1712年に、北カ
ロライナのタスカ
ローラ族が、侵
入してきたイギリ
スとドイツの植民
者達を攻撃した。

CHAPTER 17

インディア
ンの反乱

インディアン達
の独立の可能性
は、イギリスが、
7年戦争でフラン
スを打ち破った
1763年に変化を
始めていた。

第十三章

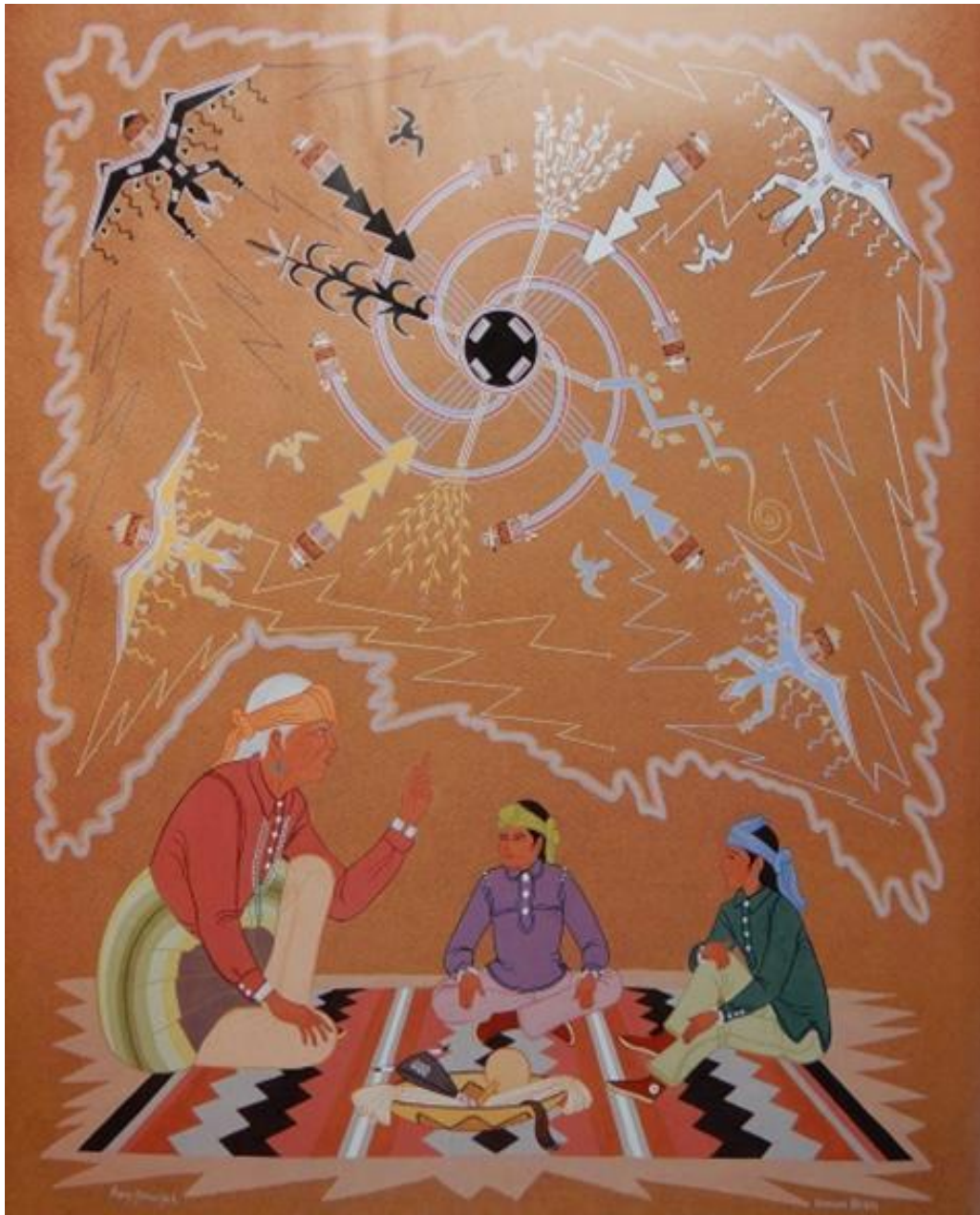
世界全体をもう一度作る事



チョクトー族の聖母マリア

VALJEAN McCARTY HESSING (SHOCTAW),
1986

18世紀には、あたかもインディアンの人達は、もう一度彼らの世界全体を作り直そうとしていたのではないかと思われる。彼らが試みたことは、伝統を保存するというような簡単なものではなかった。そんなものではなかったというケースで、彼らは、彼ら自身の先祖により引き継がれてきたもの以上に彼らの子供たちに対して伝統というものになる様なものを造りだしてきた。



もし、18世紀のインディアンの人達が伝統というものに固執していたのなら、大平原に馬に乗り遊動する民はいなかっただろうし、ナバホ族は、羊飼いや、銀細工師にも、織り手にもならなかっただろう。事実、18世紀、そして、19世紀の初頭に、自分達自身を、別々に他と全く別の人間たちだと考え出したのは、ナバホ族でもないし、また、ラコタ族でもなければ、マスコギー族でも、そして、多くのその他の部族でもない。

老人の教師と若い生徒 Harrison Begay (Navajo), ca 1966

Villages of the Dead

死者の集落

何の抵抗もできなかった病気が北アメリカを破壊した。

しかしながら、こうした新しい病気は、人々を殺す以上のことをした。これらは、日常の生活の水路を汚染した。天然痘は生き残った人達を醜い姿にした。風疹は妊娠している女たちの胎児を傷つけ、そして、子供たちが生活することに傷痕を残した。

1700年代の広範と1800年代の初期には、新しい天然痘が、またしても太平洋岸を総なめしてきた。

1840年代に入り、John Sutter と、Sacramento Valleyを旅したそのほかの白人たちは、人の骨の溢れた崩壊した家と頭蓋骨や人骨がごみ山のごとく積まれた古い集落の光景を見た。

1833年の8月に、Hudson's Bay Companyの畏獵師たちを率いていたWorkは、Central Valleyのインディアン達の間、何も知らずにマラリアを持ち込んでしまった。

しかし、何が、かれらを巨大な死人の埋葬場所と化した天然痘のあいだ、そうした集落に住んでいるようにしたのだろうか？



マndan族の土づくりの家 Karl Bodmer, ca. 1834



Mató Tópe, Four Bears、マン
ダン族の酋長 Karl Bodmer,
ca. 1834

マンダン族の間に自殺する者が出始めた

マンダン族だけで800人以上が死んだ

ミズーリ川沿いのアリカラ族、マンダン族、そして、ヒダーツァ族はたくさんの人達が亡くなったが、すぐ隣のスー族では人口が増加していた。プエブロが衰退して行ったのに、空の隣人であるナバホ族—
Apached de Nabahu、あるいは、“Stranger of Cultivated Fields”と呼ばれていたが、彼らは増えていた。クオポ族の様なミシシッピー川の小さなグループは、だんだん小さくなって行ったが、チョクトー族は、上手く彼らの人口を維持していた。

次の日の朝、夜明けに我々は、テントを襲撃し、そして、我々の鋭い平の剣とナイフで、テントを切って、戦闘をするために中に入って行った；しかし、我々の戦闘の雄叫びは、直ぐに終わってしまった。我々は目は恐ろしい光景にぞっとしてしまった；そこには、死体と死にかけた人以外、誰もいなかったのだ、どれも腐敗した塊だった。

SAUKAMAPEE (Blackfeet)

1700年代の後半、ショショーネ族の野営地の襲撃を述べたもの

木の上に造られたアツボア族のお墓

Karl Bodmer

多くのインディアンの部族の文化が、立ち上がった祭壇を使い、その上に彼らの死体を載せていた。これがオオカミなどを退け、彼らの死体を空高く運んでいた。

次の日の朝、夜明けに我々は、テントを襲撃し、そして、我々の鋭い平の剣とナイフで、テントを切って、戦闘をするために中に入って行った；しかし、我々の戦闘の雄叫びは、直ぐに終わってしまった。我々は目は恐ろしい光景にぞっとしてしまった；そこには、死体と死にかけた人以外、誰もいなかったのだ、どれも腐敗した塊だった。

SAUKAMAPEE (Blackfeet)

1700年代の後半、シヨショーネ族の野営地の襲撃を述べたもの





Mike Larsen (チョクトー族) によるFour Bears とマンダン族の死
1993

その絵画は、習慣的にまわりを柵で囲って、形づくっていたマンダン族の集落を描写していた。**集落をとりまく円陣は全て戦闘士であり**、彼らの体には、死をもたらした病気の跡が付けられている。Four Bears 自身がこのなかに含まれていた。彼は、死をも恐れていなかったのも、みずから誇りを持ち、そして、能力に満ち溢れていた。



夜の叫びながらする儀式的な狩り Harrison Begav (Navajo) , 1947
スペイン人が、アメリカではそれまで見る事のなかった大きな動物に跨り到着した時に、
多くの原住民は馬と人間は、一緒になった地球外の動物、一多分、彼らの馬の取り扱い
と制御のなかにインディアンの将来身に付ける技能の前兆を示していた、だと信じた。

馬

病気と死を持ち込んだ経済的な侵略は、もっと豊かな生活に対してもさまざまな手段を持ち込んできた。ヨーロッパ人とともに、馬、羊、そして、豚などがやって来たのである。

とともに最も偉大な変化がやって来た。1690年代までに、**テキサスの大平原のある部族が馬を手**に入れ、そして、動物たちが、Red Riverの農業をしていたカドー語族の集落に到達した。そこから、襲撃や交易を通して、それらは次第に北の地域に広がって行った。**1730年代までに、馬はMissouri River に到達**した。1770年代には、それらは、それらの領域の北の地方の限界であるカナダに入ってきた。二番目の拡大して行った道は、**ロッキー山脈の西側を北上**したものであった。馬は、ナバホ族の地域からユタ族に普及してゆき、そして、アイダホ州に入り、ショショーネ族、フラットヘッド族、彼らは18世紀の初めまでに、馬を所有したのであるが、ここに広がって行った。こうしたことから、**馬は 東のブラックフィート族に、そして、西のネズパース族やコロンビア台地 (Columbian Plateau) のそのほかの部族にまでやって来た**。そして、最終的には、もっとたくさん馬が1700年代の後半にスペイン人とともにカリフォルニアに入ってきた。ミウオク族やヨークツ族、そして、その他の者たちが、村や使節団を襲撃し、彼らは馬を運搬用と同様、食糧としても利用するようになった。



背中にダコタ族の背負い板をつけ、トラボアを引いた馬をつれていくブラックフィート族の女（1915）。元気なインディアンは、伝統的な犬が引くトラボアと比べ、ティピーの柱やその他の厄介な家財道具を簡単に運ぶことが出来るようになり、輸送が見るからに楽にしてくれた。



馬とトラボアでの旅の途中



The Days of Plenty Quincy Tahoma
(Navajo) ,
1946.

馬に熟練していることが、狩人としての勇敢さと技能を持つものとさせた

馬に乗るNavajo族の女
Gerald Nailor
(Navajo) , 1940 .

第十四章

毛皮、バッファロー、そして 交易



THE BEAR DANCE GEORGE CATLIN, 1844 .

羊、あるいは、牛の大群を追い、銅製のやかんで料理をし、あるいは、天然痘でなくなった親戚のものを嘆き悲しんでいた、馬に跨った18世紀のインディアン達は、生活基盤の変わった世界で生活していた。

しかし、彼らは、その変化を理解、それに明確な意味を与え、そして、管理する必要があった。しかしながら、このことは、白人から分かれた状態では、少なくともどんな時に対しても行われなかった。

チェロキー族のLong Warriorにより、1725年に話されたように、“それらは、遠い祖先たちとは、違った方法で持ち込まれた。そして、・・・・それらは、イギリス人なしでは生活できないことを認めなくてもならない。”



Big Sandyでの罾師達

Alfred Jacob Miler .

馬に乗った遊牧民たちは、少なくとも、繰り返し使用できるライフルの出現まで、狩りをするのに彼らの古い武器を使う事を好んでいた。

取引商品の性格

博物館では、鏡、やかん、そして、銃などが世俗的である；が、かつては、それらは、超自然的なものだった。

多くのインディアン達は、打てば音が出て鳴り響くやかんを、生きていると見なしていた；

ある者たちは霊—これは人間以外の、あるいは、超自然的な、人、のような銃とみていた。それらの轟は、雷の様ではなかった、が、今やそれは思い通りにできる雷であった。

ミシシッピーのTaensa やBayougoulaは、ガラスを水晶と同等のものとして、これを占いの道具として使っていた。

北東のインディアン達は、当初、見た目のぼんやりとしたものより、もっとはっきりと姿を映し出すので、鏡を熱心に切望したが、彼らは、未来を覗き見ることを望んでいた。

鏡は、通常は占いや予言の手段として使われていた、水のように、想像の世界を映しだしていた。しかしながら、多分神がかりの力を増大しているように鏡は、もっとずっと鮮明であった。

インディアンの製品の価値

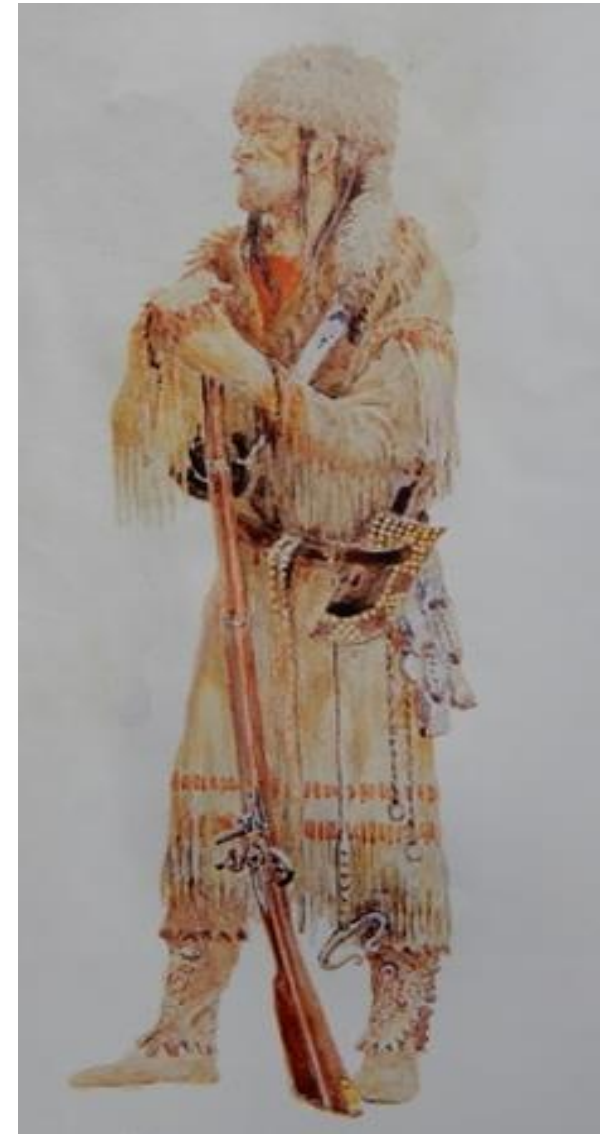
(Pawnee), ca. 1860

来た者は政府からの者だった。彼は我々を管理しようとし、そして、我々に毛布とか、鉄砲、そして、燧石や鉄、ナイフなどをプレゼントしようとした。

筆頭の酋長が彼に、我々はこうしたものは何も必要ないものだ、と言った。“私たちは自分達のバッファローが居るし、トウモロコシもある。こうしたものは、天の創造主が我々に与えてくれたもので、それらが、私たちが必要としているもののすべてだ。このローブを見給え。これが私たちを冬でも暖かくしてくれる。私には、毛布など必要ないのだ。”と彼は言った。

白人の男は、それらと一緒に牛を連れてきた。そして、ポウニー族の酋長がこう言った。“若い子牛をここから出して、大草原に連れていきたまえ。”彼は、その子牛を連れ出し、そして、酋長がその子牛に近寄り、矢で肩の後ろから射ると、子牛は倒れ、そして、死んでしまった。そして、酋長はこう言った。“私の矢が殺せなかったか？ 私にはあなたの鉄砲など必要ないのだ。”そして、彼は自分の石製のナイフを取り出し、そして、子牛の皮膚を剥ぎ、脂肪のある肉を切り出した。彼はこの作業が終わると、“なぜ、私はあなたのナイフが必要ですか？ 創造の主は、切るための道具を私に授けてくれたのだ。”と言った。

CURLY CHIEF



ハドソン湾の畏師
Olaf Carl Seltzwr

取引商品の見返りは、彼らの国内での動物とか、あるいは、白人たちが持ち込んだトウモロコシに対するそれらの見返りとは違っていた。羊が与えられて、ナバホ族は羊飼いになり；馬が与えられ、コマンチ族は牛飼いになり；牛が与えられて、チョクトー族は牛の飼育者になった。彼らは、こうした動物たちを自分達で繁殖させる事が出来た。しかし、**交易用の商品は自分達では再生産することが出来なかった**

五大湖地方のインディアン達は、“実に悟りを持った人達で、我々の功利主義、豊かさ、そして、壮麗さといったような全ての見識は、彼らには何の影響も及ぼさず、彼らは簡単にそうしたもののなしに済ますことのできる芸術を見出していた。”

Father Pierre de Charlevoix

ナバホ族やチェロキー族は銀の細工を極めて上手にこなす技術を学び、そして、ソーク族やフォックス族は鉛の碎鋳をするようになり、鉄砲の弾を製造するようになったが、しかし、布教されたインディアン以外では、鉄や真鍮で、こうした金属のくずを武器とか、イロコイ族がしていたように、鳥撃ち用の武器にするとか、マスケット銃をライフル銃に変える様なことをする以外は何も製造しなかったし、また、そんな仕事もしなかった。



貿易で手にした赤い布地とドイツ製の銀のプロツーチとボタンで出来た デラウェア族の女のブラウス、19世紀後半からのもの。

“交易”のインディアン達の見方

ヨーロッパ人は、直ぐに、彼らは自分達が完璧な人間というのではなく、時にはむしろ不愉快な人間であるという事を存分に明らかにした。彼らは、ビーバーの毛皮、バッファローの毛皮、あるいは、カワウソなどをびっくりする様な膨大な量で、あくなき要求をしてくる抑えがたい欲望を持った狂人であり、理性を持たない、食い意地の張った人間のように見えたが、しかし、と同時に、彼らは、インディアン達自身が望むような、彼らにとっても素晴らしい品物を確保しようとしていた

フォックス族は、フランスの貿易商人と最初に会った時に、“彼らの訪問客が持っているものは何であろうと、彼らにただであげられるべきであると考えた。

アルゴンキン族は、ヨーロッパ人を商品と同じように、超自然的なものとみなしていた。そして、彼らは、そうした超自然的な能力を持った生物に対して、習慣的にある一定の距離を置いていた：彼らは、哀れみと祝福を求めた。

インディアン達にとって、経済的な相互の関係—与える方と受け入れる側、買い手と売り手—という関係は、社会的な関係—親族、友人、敵の部族—とは違ったものであるという考え方は、驚くべきことだった。

インディアンの社会の富と威信

トリングット族の中でのあらゆる儀式をする中で、最も偉大だったものは、死者の名誉を与え、称えるように設定された葬儀の儀式であった。そこには、他の氏族、集落、そして、部族からの来訪者に対して品物を気前よく分配することにより、特色づけされた、主要なポトラッチの祝宴と儀式があった

ポトラッチ

Kaw-Ciaa Tlingitの女、ポトラッチ用の綺麗な服で着飾っている



酋長が、着飾ってドアのところにやってきて、そして、来客者に向かい、すなわち、“あなた方は、私の伯父が偉大なる獵師であり、また、私の先祖も偉大なる獵師たちであったことを、そして、彼らは、偉大なる数の生の動物を殺し、そして、傷つけてきたことを知っている。

彼は、話が終わると、彼に衣装を着せ、そして、彼に、杖の先を差出すように奴隷に指示し、このことが終わると彼はダンスをする。

彼らはこの日は食事をしないが、しかし、次の日には ; オットセイ、オイルで保存されたベリー、ロウソクウオの油脂、乾燥した魚、そして、催しものの終わりには祝宴をした。[よく] 儀式の主人が、客人が病気になるほど歓待をし、誰もが病気になったことが、以後は彼の名誉となり、客人は、吐き気がするほどたくさんものを食べる。そして、もし、誰も病気にならないようであれば、それは、食事が悪かったからだと言われることになったのだろう。そして、吐き出し、病気になる人達は、特別の毛布のプレゼントをされる。全ての来訪者は、スプーンと皿をもちかえり、彼らの持っている皿には料理が何時でも一杯なのだ。



酋長の遺産の分配

Josheph Henry Sharp, ca. 1901

動物の世界から得られるもの

毛皮の取引は、インディアン達が毛皮や皮革を得るために動物たちの殺害を必要とさせた。



栄誉と感謝

Fernando Padilla, Jr. (San Felipe Pueblo), 1993
Midewiwinの儀式からの抜粋



バッファローの狩猟、追跡

George Catlin, ca 1844

一匹のバッファローの利用



子牛の皮は生まれたばかりの赤ん坊の柔らかい産着になったし；大きくて、非常にしっかりした成長した動物の皮は、縫い合わせ、家族みんなが入れるようなティピーの覆いを造っていた。皮革は、このほかにも、モカシンの本体、パーフレツチェ（袋）、ロープ、そして、革紐になっていた。



厚くて、芯の入った首に巻く毛皮は、防護、そして、一枚の皮は、牛皮舟に使われた。胃袋は、料理をする時の容器；腱は、糸となった。骨は、道具として利用された：手で使うかき道具になった、ナイフや突き錐にもなった。牛の毛皮と結びつけて、肋骨は便利な小型のそりとなった。冬の毛皮は、丈夫な毛皮で、防具や暖をとるために使われた。毛皮自身は、背負い板、枕を詰め込むために使う事が出来たし、編まれてロープとされた。こうしたものの全てが、バッファローが与えてくれるたくさんの肉に加えて得られたのであった。

バッファローの利用のすべてが、厳密に功利主義的なものという訳ではなかった。骨でできた、ゲーム用のダイス、鹿皮の人形、角で作られた玩具など。飾り物は、バッファローの髪の毛、動物たちの尻尾は、小屋の飾り物、バッファローの顎鬚は、衣装とか、武器の両方を装飾する。両側の角と頭は、頭飾りの材料。呪術者は、動物の四つある胃袋の空洞の最初のものを、しもやけや皮膚病と戦うために使用、膀胱は、薬を入れる袋に、尾は、薬の交換として使われていた。

珍しい、黄色や白子のバッファローの皮革は、良く、儀式の時に着られた。バッファローのひずめと陰囊は、ガラガラに、そして、皮の太鼓、太鼓用のパチが、儀式用に造られていた。



Harper's Weeklyの1874年の表紙がバッファローの毛皮の取引のための屠殺者を取り上げていた。単一の緑の毛皮は、約\$1.25で取引された。しかしながら、処理されたローブは、ヨーロッパの市場では、\$100以上で売れていた。



1807年に、オタワの聖人である、The Troutが、Michilmackinacの近隣のインディアン達のところに、偉大なる神からのメッセージを持ち込んで来た。

あなた方は、森の中の動物たちが姿を消し、そして、散り散りになったと不満を言っている。どうしてそれをもっと違った姿にすべきだろうか？ あなた方が彼らの毛皮のためにだけ自分達でそのように彼らを殺し、そして、彼らの体を腐敗させ、あるいは、一番良い部分を白人たちに挙げています。私は、これを見て悲しんでおり、そして、彼らが二度とあなた方のところに来ないように大地に戻してやっている。あなた方は、あなたたちが食べて行くために、そして、衣装を纏うのに必要な分だけ以上に動物たちを殺してはならないのだ。

第十五章

相手の思惑次第の均衡



毛皮と取引されるウィスキー， 1871

18世紀における北アメリカの重要な地域全体に渡り出現した、インディアン達と白人たちとの間の文化的な適合があったが、その一揃いは、漠然と中立の立場と呼ばれたのかも知れない。それを作り出していた過程の部分は、毛皮の取引、そして、適合の別の形の中での仕事でのものであった。それは、ヨーロッパ人がインディアンになったのではなく、これらは起こり得るものであったけれども、あるいは、インディアン達がヨーロッパの文化に適合した、これもまた、起こり得るものであったが、このわけでもなかった。それは、インディアン達とヨーロッパ人が、それぞれ彼らの方法の正当性を確信し、それらの重要性も、そして、必要な義務を完遂する適当な手段の責任など負うことも共有しないような人達を扱わなければならなかったことから出来上がったものであった。

中立的な立場の性と性別

中立的な立場の創造への本質は、性と性別の問題であった。1700年代のインディアン達と白人達の社会の間の様々な状況で出会う女達と男たちは、常識的な性的な欲望や、そうした欲望を満足させるための最前の方法、また、男性と女性の両方に、取るべき行動の適当な手段について、文化に基づく極めて大きな違いに関わる事項と出くわさなければならなかった。

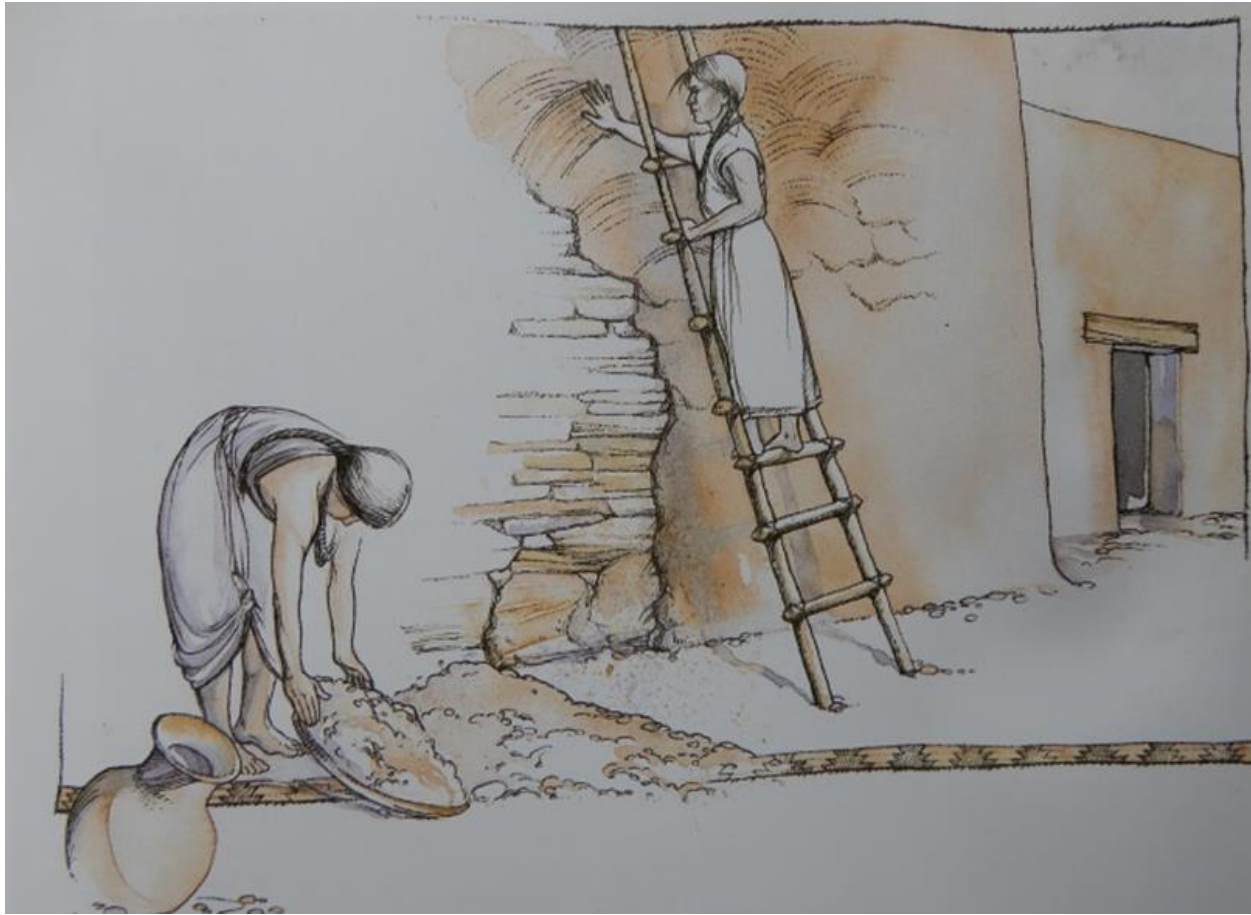
インディアンの人達と同様、白人達は、確かな物理的な行動は、“自然で有り”、そして、世界中どこでも同じだという仮定を求めた

性別というのは、どの行動とか規則が男性に適当なものであり、どれが女性に適したものであるのかというさまざまな社会的な目印となっている文化的な色分けである。



畏師の花嫁

Alfred Jacob Miller, 1850



Hopi族の女たちは、自分たちの家をほとんど自分達で建て、その家の所有者だった。

イロクオイ族の人達、多くの南東部地域の人達、そして、ポウニー族の間では、子孫は、母方の血を引く人達で、家の財産や家名などは女性の繋がりを通してその子孫に継続されていた。

女達は、家を保持しているだけでなく、彼女たちは、粘土を混ぜ合わせ、そして、壁を組み立てるなど、それらをほとんど、建てていた。

男たちは、トウモロコシ畑で働いていたが、しかし、その畑は、彼らの女たちの親族の所有物だった。女達が、氏族の神聖な儀式のための道具を保持していた。

そして、多くのインディアンの人達、元来、ほとんどが、全てではないにしても、プエブロ族の者たちは、男よりも女性の家系を通した子孫たちであった。



Auchiah の後
Kevin Warren Smith
(Cherokee), 1990

1794年に、セネカ族に混じって旅をしている時に。



もし、インディアン達が、身分の高い女達、大首長の母、そして、国の承諾を得ないで戦争に行くなら、偉大なる精神は、彼らに戦闘で功績を上げさせるようなことはしないだろう、彼らと彼らの努力を恥さらしの状態で終わらせるだろう。

商取引の関係と性的な関係

チェロキー族のところでトウモロコシを買うときには、彼らは、女達と取引をした

チヌーク族では、女達が毛皮とか、魚の実際の取引を取り仕切っていた

17世紀の後半から18世紀の前半にかけて、オハイオ州や五大湖地方の、“狩猟をする女達”が旅をし、そして、フランス人の相棒たち、彼らのために彼女たちは、料理をしたり、木を切ったり、そして、衣服を造ったりしていたが、彼らとの性的な関係を持つようになった。

1766年まで、オハイオの周辺にいたデラウェア族の酋長が、ラム酒の交換で、白人達と性的な関係を持った女達を、“誠に悪い”と非難した。女達がラム酒を飲むという訳ではなかったが、その代り、それを彼女たちの集落や町に持ち帰り、そして、高い価格でそれを男たちに売りさばいていた。

1766年まで、オハイオの周辺にいたデラウェア族の酋長が、ラム酒の交換で、白人達と性的な関係を持った女達を、“誠に悪い”と非難した。女達がラム酒を飲むという訳ではなかったが、その代り、それを彼女たちの集落や町に持ち帰り、そして、高い価格でそれを男たちに売りさばいていた。

Marie Louisas

Rachel Mohawk



James Otto Lewisより書かれた、チパワ族の女の絵

背負い板にしっかりと結び付けられ、赤ん坊が運ばれている姿。板は木で作られていて、板が持ち上げられた時には子供を支持するように設計されていた。

この背負い板は、母親がそれを下に降ろし、そして、多分、木に寄りかけて、それが倒れたりしても子供に怪我をさせる様な恐れが無いようにできていた。板の前面には、倒れて、子供の顔や頭を守る様な突き出た輪がついていた。

The Eagle of Delightの肖像画 彼女はShaumonekusseと言われたインディアンのお好みの妻として知られている。

1821年に、ワシントンを訪ねたが、そこで、若い女性は、彼女の“純潔さと飾り気の無い”とても興味ある要望が称賛された。

チパワ族の女は、一年の間、悲しみの包みを持つことで、彼女の死んだ夫のために深く悲しんでおり、この間は、彼女は再婚することが出来ない。



コロンビア川下流でのLewis and Clark
Carles M. Russell, 1905

Sacagajaweaは、どんな意味でも探検隊を案内したと言うものではない；その地域のほとんどは、彼女には、目新しいものだった。しかしながら、彼女は重要な点で助けることをした。シヨシヨーネ族との間での通訳として彼女の助けには、はかりしれないものだった。



Mansans族のアーチュリー

George Catlin, ca. 1844

酒の誘惑

チョクトー族のSixtownsの酋長のOuma首領は、酒に対する強い欲求を社会的な要望と比較していた。ラム酒は、女性の様なものだと彼は言っていた：“一人の男が彼女を望むとーそして、彼女に会うとー彼は、彼女をどうしても持たなくてはならない。”

酒が、毛皮の取引への究極的な誘因となった。酒が依然には何も存在しなかったところに欲望を作り出したのだ。インディアン達は、他の商品のために狩猟をしなくても、酒を手に入れるために狩猟をしていたのだらう。



Chippewas族と
Assiniboines族
の酒を飲んだ
時のどんちっん
騒ぎ



ウィスキーがインディアン達を征服した、フロリダ戦争 T.P. Hunt , ca. 1830.

2人の白人の間の会話が、こう言っている。“よろしい、私がこうしたブラックハウンドの失敗を狂喜する。彼らを雇うなんて残酷で、不公平で、しかも、反キリスト教的だった。”

すると、もう一人がこう答えた。“彼らが、もっと違うやり方で、もっと確かに、そして、より胸が悪くならない様な方法で、絶滅されたに違いないと気が付いたのは、それもまた、あまり賢くなかった。”“N.E. ラム酒、あるいは、インディアンの絶滅”を記述した小箱にちなんだもの。

Frank Leslieの1883からの Illustrated Newspaperの中に見られる漫画

首領が“私たち芸術家が一時的ではあるが、捕えられたアパッチ族の者と何をするのかを知る事が問題となっているインディアン局の助けのためにやって来る”と教えている。



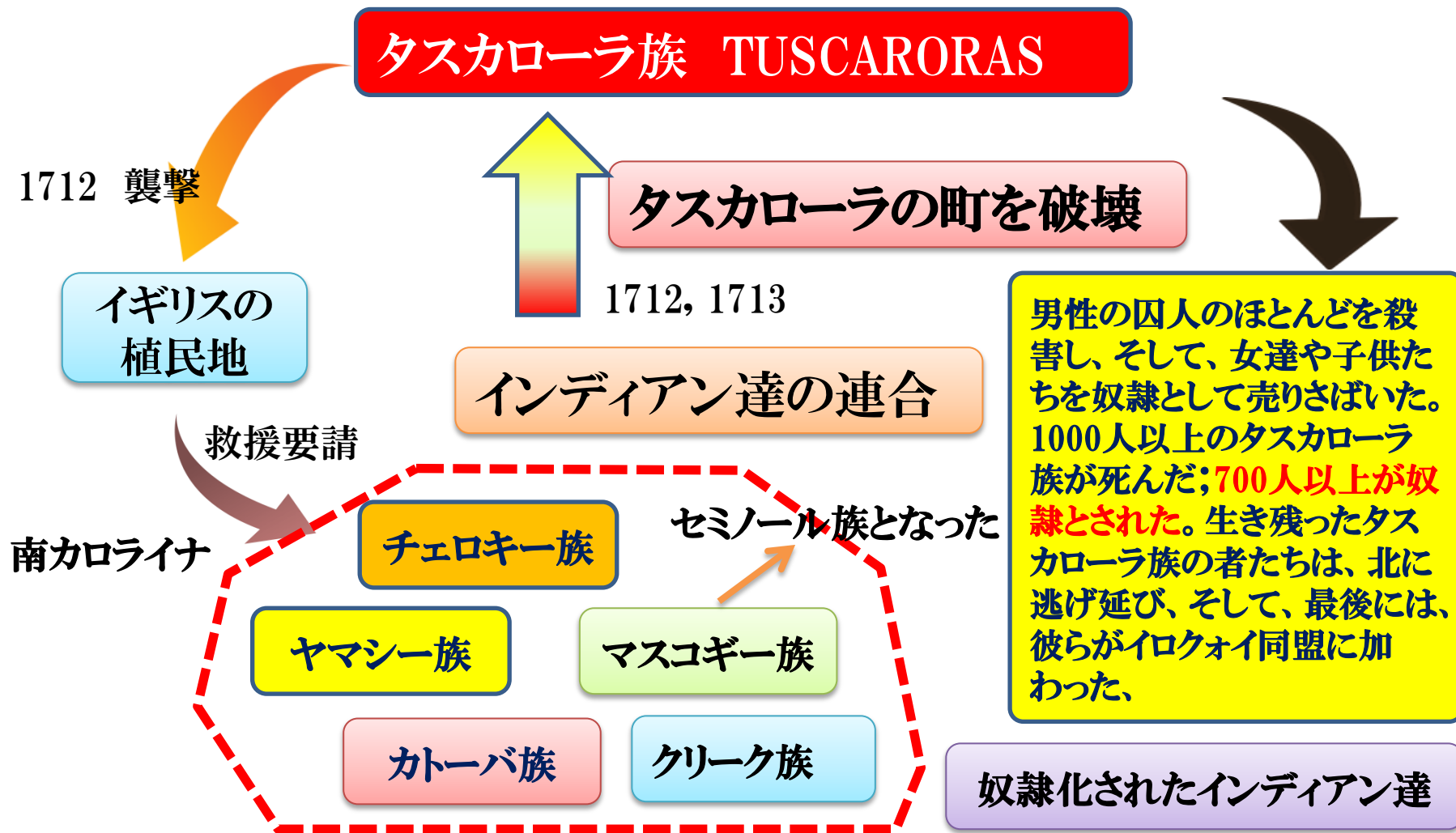
第十六章 血を流すこと



Sioux族とBlackfeet族との出会い Charles M. Russell, 1903

容易でない同盟とインディアン奴隷の取引

タスカロラ族戦争、これは、残酷なほんの僅かの殺戮であったが、インディアン達に影響を与えた二つの新しい力を明らかにしたー18世紀の初期の白人との関係:新しい政治的な同盟の構築、そして、インディアン達奴隷の取引の増大である。



力の均衡

ヨーロッパ人の競合するグループの存在

アパラッチ族

彼らは潜在的な奴隷で、スペインとの同盟部族

フランスのルイジアナ統治官

Jean-Baptiste Le Moyne, sieur de Bienville

チョクトー族

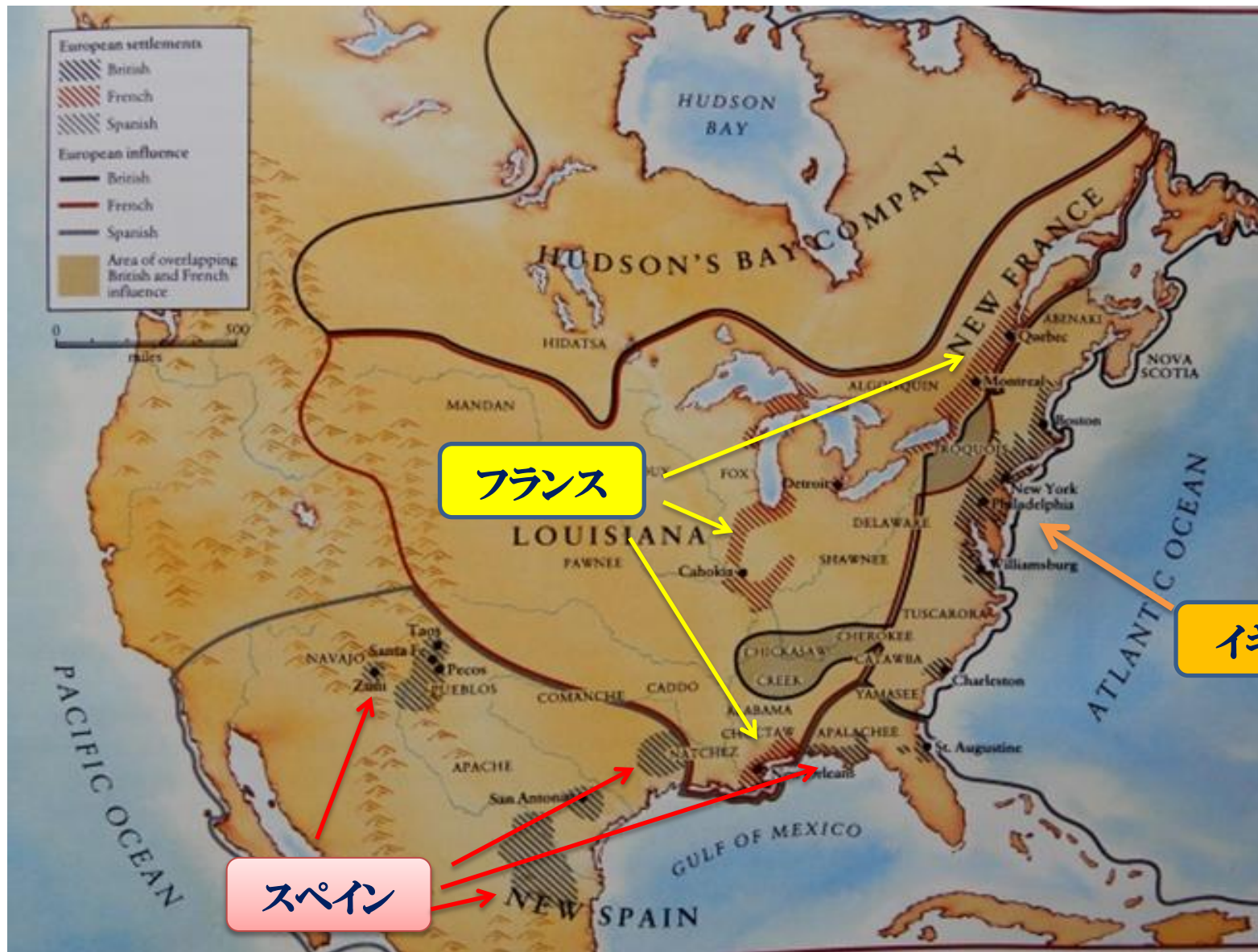


チクワソー族

の戦闘を煽り立てる政策



CanadaのSelkirk 植民地のRed River 入植地にあるDouglas 砦で、Andrew Bulgar大尉に話をしているRed Lake Chippewa酋長を描いている。



18世紀初頭のヨーロッパ諸国の入植地 実際のヨーロッパ諸国の存在は小さかったが、北アメリカの相当広い地域が、イギリス、フランス、そして、スペインにより領土の所有が主張されていた。”



1710年に、Tee Yee Neen Ho Ga Row(左)とSa Ga Yeath Qua Pieth Tow (右)
の二人のMohawk族の大首長が、入植民により、ほかのMohawkの者と人の
Machican人に付き添われて、イギリスに送られた。彼等は、フランスとの彼らの闘
争での国王の支援を上げてもらうために行った。

イロクォイ族の外交的手段

17世紀の戦闘の中で、フランス軍とその同盟軍に敗れ、イロクォイ族は、民主主義の堂に入った一面のもとに、イギリスとフランス-インディアン同盟との間に自分達の立場を苦心して築き上げた

Vaudreuil侯爵のPhilippe de Rigaud

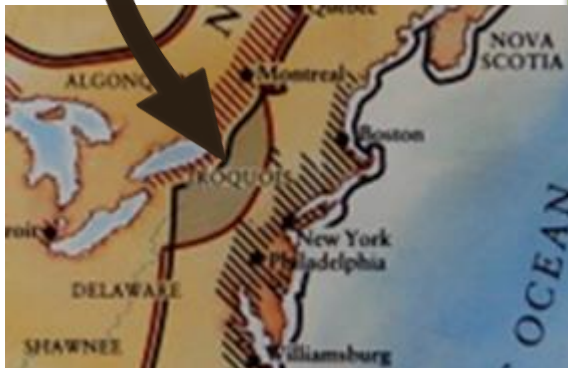
“五つのイロクォイ族の集落は、イギリスの植民地よりももっとずっと恐ろしいものだ…….24年間の経験が、私をして、彼等との戦闘は、この植民地にとって決して良いものではないという結論に至らしめた。私は、それが我々にどれだけの負担になり、そして、人々にとってそれを取り戻すことがどれだけ難しいことかを知っている”

イロクォイ同盟

18世紀の初頭での帝国の戦争に、イギリスとともに戦った

モーホーク族

イロクォイ族がニューヨークに提供した主たる支援は、フランスとインディアンの同盟軍のニューイングランドへの攻撃に対し、これを防ぐ為の障壁を建築することであった。



イロクォイ族の街や集落は自治的なものであった。老人の女達が氏族を代表する男たちを集落や、部族の議会のために任命した。彼らは、今度は、同盟全体の出来事を管理する為のOnondagaでの会合に49人の代表者を任命した。

フランスの子供たち

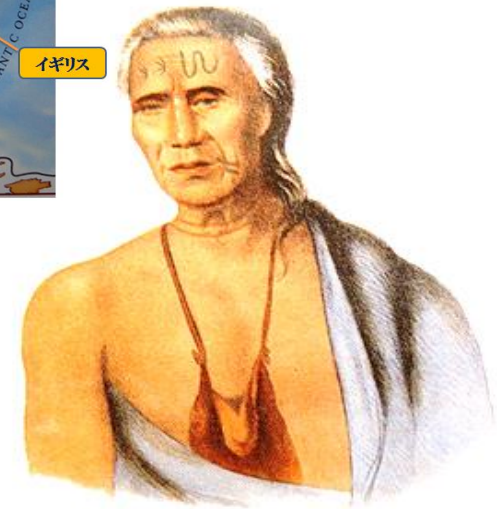
フランスとの同盟

大西洋からニューオーリンズにかけて、そして、大平原にまでも網羅する重なり合う一連の同盟

この張り巡らす網の中心は、メイン州のAbenakis族、カナダのいわゆる一定住所のある使節団のインディアン達、五大湖地方、ならびに、オハイオ溪谷のインディアン達、そして、最終的には、ルイジアナのフランスと同盟を結んでいたアラバマ族たちであった。加えて、比較的、独自性を持って取引をしていたフランスの貿易商たちが、大平原との境界あたりのカドー語族と比較的緩やかな一連の同盟を造っていた。

カナダの統治官が同盟を結んだ我々に話しかける時に、かれは、我々のことを子供たちと呼び、そして、こう言う。“我々はあなたたちの父親で、あなた方は、この同盟を固く守らなければならないし、我々もまた同じようにするだろう。私は、父親が子供にするのと同じように、あなた方を守ろう。”と。この守るという事は、彼の口からこのように話していながら、と同時に、我々の相手に対して、弾薬を提供し、援助することで我々の頭をたたくことなのだろうか？

敵対する部族のために支援をするフランスに対するSenecaの防御、1684.



Dekaware族の酋長Lapowinsa
彼がWalking Purchase Treatyに署名した。

THE WALKING PURCHASE

1734年, Thomas penn、William Pennの後継者で、ペンシルバニアの所有主であった、彼は、自分の家族のクレジットを支払うために土地を売却する必要があった。彼が望んだ土地は、デラウェア川の支流で、そこには、ペンシルバニアのデラウェア族の土地と、ニュージャージーから避難してきたデラウェア族の土地が含まれていた。Pennは、デラウェア族に、古くなった、完全なものでない、しかも、まだサインもされていない1686年の行為は、事実、その支流に対する売却の法的に意味の無い



請求であると説得した。インディアン達は、その土地のことを、譲渡は実行され、そして、彼らは、境界線の近隣は、比較的些細なものであると考え、それを受け入れた領地であると誤解していた。土地は、ある特定の場所から、歩いて、一日と半の距離のところまでのPennの領地へと移ったが、ただし、そこには、歩行する人は、どちらの方角に行けばよいのか、言述していなかった。1737年に、ペンシルバニア州が境界線を定めた。Pennは、経路を定めために、強力な歩行人として、3人の木こりを雇った。2人は、疲労して途中でやめたが、残りの男が1日半で、64マイルを踏破した。かれは、これによりデラウェア川の支流のかなり奥まで権利を主唱し、これを持って行った。彼は、Kittatinny山の後方12マイルまでを主張した。その言い分は、ざっと、1,200平方マイルにまでになった。それは、デラウェア族に、彼らの支流の土地の全てに相当するものであり、そして、Minisinkのデラウェアもまた、譲渡することとなった。Pennは、法的に有効な写しの所有を主張したけれども、すぐに、当初の“取り決め”は、消失してしまった。デラウェア族がこの明らかに詐欺のようなものに抵抗し、そして、退去を拒絶すると、ペンシルバニアは、イロクオイ族、彼らは、デラウェア族の想定上の征服者であったが、彼らに、土地を放棄するよう指示することを説得した。



Eagle Dance

チェロキー族、イロクォイ族、アイオア族、そして、チョクトー族など、彼らの間の多くの部族が、それぞれ異なった理由で、Eagle Danceを実行していた：親交を作り出したり、より強く絆を結ぶため、狩猟や戦闘、病気の治療（部分的には、“eagle sickness”）がうまくいくことを確かなものにするために、あるいは、敵対する部族との平和をつくるためになど。



1900年以前の頭かぶりと古い時代のバッファローのロープを纏ったHenry Bright Wings (Crow) の肖像画

戦闘の中で、最も無慈悲で有り、そして、容赦のなかったものは、ナチェス族に対するものだった。

われわれは、フランス人がどんなことを考えているのか知らなかった。なぜ、・・・フランス人が我々の国に来たのか？ われわれは、決して彼らを求めたいたのではない：彼らは、彼らの国が、全ての人達がそこに住み、そして、生きていくためには、小さすぎたので、我々に、領地を求めて来た。私たちは彼らに、喜べるような土地をとっても良いと話し、そんな土地は、われらにも、そして、私たちにも十分にあった；それが、双方も者にとって、同じ太陽が照り輝き、そして、我々は、彼らに私たちの持っている生活必需品を差出、彼等か家を建てるのを支援し、そして、彼らの畑での労働を手助けしよう。我々は、事実、そうしてきた；これが真実だろうか？フランス人の人達のために私たちには、どんな機会があったにだろう？ 我々が、彼らのために、我々のトゥモロコシの一部を、そして、獲物の一部を、漁の魚の一部を割いてきたことを見れば、彼らがやってくる以前に、私たちは、私たちが今している以上の良い生活をしていなかった。どんな斟酌をする中で、良い機会を持ったのだろうか？ それは、彼らの鉄砲だったのだろうか？ われわれが使っている弓や矢は、自分達がうまく住んでいくために、十分だ。それは、彼らのための白や、青や、そして、赤い毛布だったのだろうか？ われわれは、バッファローの毛皮があれば、十分だ。温かいし；我々のところの女達は、冬に備えて、毛皮の毛布を作ってきたし、夏用には、桑のマントを作ってきた；これは必ずしもきれいだという訳ではないが、しかし、女達は、彼女たちの今の現実よりも、もっと働き者で、あまり苦痛に感じていなかった。究極において、フランス人の来る前には、私たちは、彼らの持っているもので十分満ち足りている男たちのような生活をしていた；しかし、今日では、決して喜べない、まるで、奴隷の様な生活を強いられている。

イギリス人とイロクォイ人

イギリスの同盟は、決して、フランスのそれに対抗するものではなかった。南部の地域では、フランスの力に対しては、彼らは、チェロキー族やチョクトー族に頼っていた

イロクォイ族は、ペンシルバニア地域の中では、とりわけ重要な役割を果たすようになった

1736年に、ペンシルバニアの役所とイロクォイ族の議会が、イロクォイ族は、ペンシルバニアのインディアン達がイギリスとの間でなにかを取り扱うときには、インディアン達のための調停者で、彼らの代弁者として役割を果たすべきであるという事で合意した。

イロクォイ族は、特命の王として、オネイダ族の酋長のShickellamyをペンシルバニアのインディアン達を監督する為にSahmokinから、Susquehannaの支流の地に派遣した。獲物の動物たちが減少し、そして、Walking Purchaseと言った様な領土の譲渡がほとんどのデラウェア族やショウニー族を西部に移動させるとして、イロクォイ族は、Tanacharisonを西の地域の街の副の特命王に任命した。それは、利己主義的なものであって、イロクォイ族にとっても、また、ペンシルバニア族にとっても、7年戦争(1756-63)にフランスに加担し、とても苦い思いをしたシャウニー族やデラウェア族と同じように大きな代償を払う事になり、イロクォイ族は、彼らの支援した仲間たちの忠義を失う事となった

スペインと西部の地域

ミシシッピーの西側の領域では、彼らは、18世紀の間、ほとんどのインディアン達にとっては、最も有力なヨーロッパ人としての存在であった。



兵士たちに守られた宣教師たちが、サンフランシスコから南の海岸地域に沿って居住していたインディアン達のほとんどを使節団の施設に集めた。

教会の修道士のより、規制され、そして、統制された生活へと、彼らの“自由で、勝手気ままな状態”から生まれ変わらせようとした。

Esselen族

Salinan族

Chumash族

Luiseno族

Ipai族

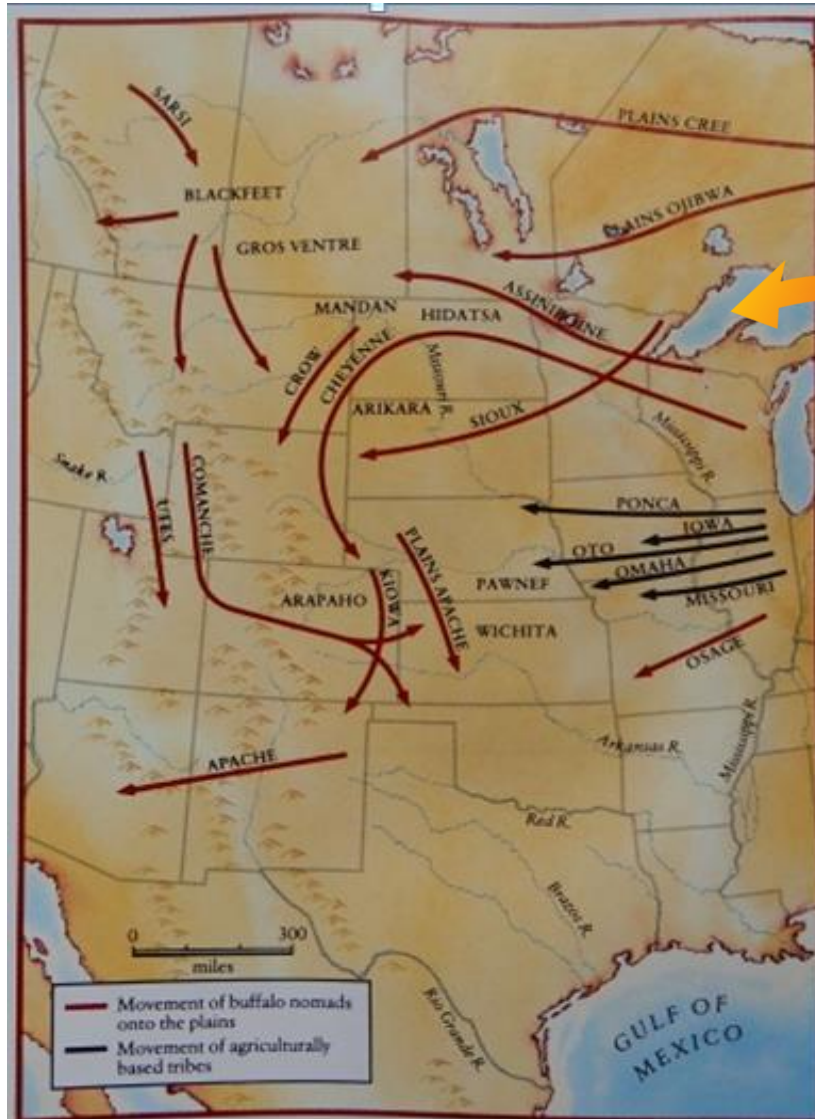
Tipai族

Gabrielino族

中央溪谷の大量殺戮

大農場のための新しい土地を切り開き、そして、既にある農場に襲撃するのを止めたために、メキシコ人達がカルフォルニアの内陸のインディアン達に対して殺人的な布告なしの戦闘を仕掛けた。1837年に José Maria Amador に率いられた探検隊が、“未開のインディアンと、彼らのキリスト教徒の同伴者”の両方を祝宴に招待した。彼らは、それから、キリスト教徒たちは離して、彼らを取り巻いた。帰りの行程で、“我々は、半マイル、あるいは、1マイルごとに、彼らは死ぬところだったことを理解させながら、彼らの内の6人を膝まづかせて、祈禱師に言うようにした。各人は、4本の矢を打たれ、そのうちの2本は前から、残りの2本は後ろから射られた、と。そして、死ぬことに抵抗した者は、その場ですぐに槍で殺された、と。” 100人ほどのキリスト教徒を退出させ、彼らは非キリスト教徒になった。Amador と一人の友達それぞれが水筒を取り、そして、“全てのインディアンを洗礼した。その後、彼らは背中から銃撃された。最初の一斉射撃で、70人が死んだ。私は、残った30人のために二度目の命令をし、彼らの全てが死んだ。”

遊牧民の出現



19世紀までに、馬に跨った者たちが、ミシシッピからの西の地域を貫く、きわめて広大な領域を占領した。彼らが馬を手に入れると、彼らは、大草原、大平原、そして、南西部の砂漠地帯を人々の大釜を煮えかえすようにしながら、自分達の住む場所をしばしば変えていた。

コマンチ族

シャイアン族

アラパホ族

カイオア族

クロー族

ユート族

スー族

オセージ族

厖大な数のその他の部族

馬の到達が、コマンチ族、ユート族、アラパホ族、シャイアン族、クロー族、カイオア族、オセージ族、そして、スー族のような部族が大平原での新しい遊牧民生活を築き上げるのに苦勞させている間に、鉄砲を早々と手に入れた東部地域の部族は、自分達の周囲の部族をずっと西の内陸に追いやって来た。



19世紀の初頭までに、スー族、アラパホ族、そして、シャイアン族のゆるい同盟関係が大平原の北部の地域を統治していた。



クロー族の狩人とその家族が、移動して行くバッファローの群を追う

第十七章 INDIAN REBELLION



インディアンの反乱

帝国のあがきの中でとらえられたもの

フランスは、大英帝国に航海路を閉ざされ、贈り物をし、それを供給する能力が無かったので、七年戦争の間に築いた同盟の多くを失ってしまったけれども、実際の領土割譲がインディアン達には衝撃であった。フランスは、カナダを大英帝国に、そして、ルイジアナをスペインに割譲した。

フランスと同盟したインディアン達、このことをAmherstは忘れていたように見えるが、彼らは、何度も繰り返し、大英帝国の集団を殺害し、そして、植民地の開拓者たちを大混乱に追い詰めていた。1755年には、200人のフランス人とカナダ人、そして、600人のインディアン達が、Duquesne砦(現在のピッツバーグ)への大英帝国の探検隊を撃退し、彼ら側の二倍程度の被害をGeneral Edward Braddockと大英帝国の軍隊に与えて、これを打ち破った。彼らは、およそ500人近くの死んだ兵士をBattle of the Wildernessの戦場に残して去った。



クロー族の戦闘用の楯

Pontiac'sの反乱

Pontiacの大反乱の砦と戦闘地。1763年の春に始まった、大英帝国に対して、オマハ族の酋長Pontiacが五大湖地域の部族を率いて起こした戦争。部族は大英帝国の多くの砦を手中に納めることに成功はしたが、しかしながら、包囲攻撃は結局は、決定的とはならない休戦状態に収まった。



Fort Pittでの包囲の経緯のなかで、General Amherstは、インディアン達の中に、天然痘の病原菌の含まれた毛布を分配するように命令した。この陰險な戦略が、インディアン達の攻撃部隊の間に伝染病をはびこり始めさせた。

Pontiacの大反乱、これは、大英帝国を締め出し、フランスに安全に戻そうという試みとして始まったものであるが、これが、大英帝国がフランスのより支配的なやり方に適合させるような形で、大英帝国とインディアン達の間の特許関係の条件を作り出すことに成功した。



PontiacのRoger's Rangersの歓迎、ca. 1766. 大英帝国がフランスから奪い取った時に、大部分のインディアン達は、友好的な関係—豊富な物資の供給—が、継続されると考えた。インディアン達と面会した植民地の統治官には、Robert Rogers, Sir William Johnson, そして、貿易商のGeorge Croghanたちが含まれていた、彼らの誰もが、平和が普及すると希望し、信じていた。

新しい共和国への対向

1775年のアメリカ大革命の勃発は、インディアン達の、競合し合う政治的な力の中で、政治的に安定した場所を作り出そうという能力の蘇生を約束していたように思われるが、しかし、大革命は、以前には十分な力を発揮していたインディアン達の同盟体制の破壊を証明した。

チェロキー族

彼らの領地に侵入してきている植民者達に、人々を殺害し、彼らの作物を破壊し、そして、街を焼き払っている革命軍の軍隊からの侵略に、ただ単に、対面させようとしている大英帝国の動機に、頻りに加わろうとしていた。

イロクォイ同盟

機械的に彼らの穀物や果樹園を切り倒し、そして、街を灰と化していたアメリカの軍隊により侵略された彼らの領地を維持するためにだけ、大英帝国に参画していた。イロクォイ族のほとんどが、イギリスからの供給物資に頼る避難民となった。

アルゴンキアン族

大英帝国に加わった。オハイオの北の軍事的な勝利となった地域であったが、しかし、彼らは、ケンタッキーに入植したアメリカ人を追いたてることには失敗した。

ミシシッピー川の東側のインディアンの人達は、自分達自身のための独立した政治的な役割を維持し、彼らが作り出した中道的な立場を保持しようという最終的な試みをした。

HANDSOME LAKE

1760年から1820年に掛けての、動乱の時の間、インディアンの人達に救済の伝言で起き上がって来た全ての預言者たちの間で、最も長続きした衝撃を持った人は、セネカ族、彼らは、6つのイロクォイ同盟の一番西の部族であるが、その**Handsome Lake**であった。アメリカ独立の後、これに続く残酷な数年間に、彼は、勝利と、彼の人々の暫時の追立を目撃して。彼は酒におぼれた。彼は、憂鬱になり、そして、ふさぎ込んで行った。

1799年に、“黄色い肌と乾いた骨の人以外”、彼の娘が、彼に言った時、彼は、幻想を持った。天空を旅している時に3人の天使が彼のところに現れた。彼らは、George Washingtonと会った。彼らはキリストに会った。そして、キリストが**Handsome Lake**に次のように話しかけた。“さあ、あなたの人達のところに行って、彼らが白人たちの言うとおりにしていたら、道に迷うようになるよ、と言いなさい。”と。

その幻想と彼らの伝言は、Gaiwiioの心に響いた、“いい言葉だ”、**Handsome Lake**の福音書、それは、キリスト教の福音書のように、部分的には歴史であり、そして、また別の部分では適当な儀式を実行する手ほどきであり、また、部分的には道徳的な規約であり、また、預言でもあった。しかし、彼は、彼の教えをもっとずっと昔の儀式に接いだー真冬の儀式、**Green Corn Dance**と言うようなものに。そして、彼の教えの多くは、それがもっと古いイロクォイ族の信仰を保持していたにしても、キリスト教の要素を一緒に取り入れて、新しいものとなっていた。

Handsome Lakeが次第に、2番目の福音書に熱中するようになった1801年のあと、この世界の福音書は、イロクォイ族が、彼の考えが彼についてくる人々の強さを次第に弱めていくと思うような社会的な問題に直面し、そして、目を向けた、その新しい社会の状況にうまく適合した。彼は、節制、農業、平和、領土の保全、そして、白人達技術の導入に熱心となった。彼は、父親に対し、彼らがそれまでにはなかったような、集権力と権威を与えた。そして、やがて、宗教が保持したように、それが、新しいやり方となって行った。それは、**Handsome Lake**の**Old Way**となり、そして、伝統となった。



Cornplanter、彼は、偉大なるセネカ族の酋長で、独立戦争の間、アメリカ軍との彼らの戦闘でのイロクォイ族のリーダーの一人。

大英帝国の支援なしに、インディアン他は、協定の折り合いをつけ、そして、1793年に平和を保障するGreenville砦の協定で、アメリカに対する彼らの領土の最初の譲渡を実施した。

その協定は、その領域におけるクライマックス的な苦闘の前の、一息の代表であった。19世紀の初頭に、ショーニー族の二人の兄弟、TecumschとTenskwatawa、彼らがオハイオの北の地域の士気を失った人達の再統合と元気回復をさせる動きを始めた。



Tenskwatawa



Tecumseh の死 Thamesの戦いで、

HORSESHOE BEND

19世紀初め、クリーク族、あるいは、マスコギー族のあいだでの宗教的なやり直しが、Tecumsehの汎-インディアン抵抗の呼びかけに呼応して、神聖なる一揆と等しい程のものに導いて行った。しかし、全てのマスコギー族の者がアメリカに対抗して立ち上がったわけではなかった。合衆国に対する戦闘は、また、内戦でもあった。そして、1814年の3月27日に、Tohopekaの街で、“Redsticks（赤い棍棒）”としてアメリカ人に知られたマスコギー族の戦士たちが、1500名のアングロ-アメリカ人と500名のチェロキー族の人達に対面してTallapoosa川のhorsebend shoeに彼らのバリケードを築いた時、彼らの100人の田舎の住民が、攻撃する人たちと一緒にいた。

僅か、やく3分の一のRedsticksのものが火器を持っていただけで、彼等は、自分達には、もっと大きな神聖なる力があると思っていた。彼らは、敵の銃撃部隊は自分達を傷つける事は出来ないと信じていた。彼らは、彼らの預言者達が侵略者に対して、真実の世界を築いてくれると信じていた。ライフル銃とカノン砲が、しかしながら、もっと強力なものであることを実証した。Redsticksの生き残りの者たちが思い出しているように、戦士たちは、“まるで木の葉のように”散って行ったのだった。彼らの内の80%のものが、逃げながら戦場や、あるいは、川で死んでいった。それは、インディアンの人達が、アメリカ合衆国に抵抗したなかで、受けた最も大きな敗北の内の一つだった。それが謀反を崩壊した。



Tallapoosa RiverでのHorseshoe Bendの戦いのあと
Andrew Jacksonに敬意を払っているCreek族のWilliam Weatherford



Sauk族の戦士

インディアン排除の政策

1830年の5月に、Andrew Jackson大統領が、インディアン排除の協約法に署名をし、こうして、彼の前任者たちが、長期にわたり支持をしてきた－東部のインディアン達による土地と、連邦政府が彼らのために獲得するだろうというミシシッピー川の西部の地域と、“任意的に”交換するという、政策に権威を刺し込んだものとなった。

ジョージア州は、一方的にチェロキー族の領地にまでその法律を拡張していった1820年(効力を発揮したのは1830年の1月1日から)、その時、Jacksonは、連邦の軍隊を引き揚げ、チェロキー族に対する保護を否定した。1830年になり、部族の役所を持っていたチェロキー族は、自動的に犯罪人になっていた。

アラバマ州やミシシッピー州が彼らの法律をインディアン達の領域にまで拡張するというジョージア州に見習い、そして、ノースカロライナ、テネシー州がこれにつづいた。チョクトー族、チクワソー族、チェロキー族、そして、クリーク族にとっては、結果はまさに惨めなものだった。



涙の街道

退去－“インディアン問題”に対する政府の解決策－、これには、南東地域の数千人のインディアンをオクラホマ州のインディアン領地、ならびに、西部の各地に配置転換するということが含まれていた。こうした強制的な行軍の最も良く知られた、そして、多分もっとも恥ずべきものは、チェロキー族により経験された、彼らのまだ見ぬ土地への旅の苦しい体験であった。



The Trail of Tears By Robert Lindneux. 1942

THE TRAIL OF TEARS

チェロキー族の退去の数年後に、民俗学者のJames Mooneyが、インディアンと白人の両方の関係者に対して質問をし、そして、彼は彼らの説明をかれ自身の考えの一つのなかに整理した。“夕食を取っていた家族は、ドアの入り口の方向に突然の銃剣の閃光がはしり、びくっとさせられた。そして、囲いの柵のほうに続くいらだたしい何マイルもの道を、攻撃とのろいの言葉とともにつれて行かれるために立ち上がらされた。男達は、自分達のいる場所で捕まえられ、そして、その道を連れていかれ、女たちは、〔紡ぎ器の〕歯車から離れさせられ、子供たちは、遊びを止めさせられた。……”

逃亡を防ぐために、兵士たちは、それぞれに家に行き、そして、できるだけ遠くからこれを取り巻き、気づかれずに居住者を見つけ出すように指示された。ひとりの年老いた家長が余りにも静かなのに驚き、彼の子供たち、そして、孫を彼の周りに呼び集めた、そして、びっくりした兵士たちが見ている間、膝間づいて、彼らの言葉で一緒に祈るように言った。そして、起き上がり、逃亡する道に導いて行った。ひとりの女が、取り囲まれた家を見ながら、入り口の方に行き、この時が最後と、鶏たちを、食べるために呼び集め、そのあと、彼女は彼女の幼児を背中に背負い、そして、その他の子供たちの手を引いて、兵士たちに連れていかれる夫の後について行った。

しかし、兵士たちの後に、白人の略奪者たちが、チヨロキー族が後にした家と墓からものを略奪する為にやってきて、彼らの生活用品を盗んで行った。

チェロキー族の人達は、仮キャンプに滞在中、病気で倒れた。多くの人達は、水と食料のほとんどないような干ばつの最中の西へと別れて行った。彼らは、まさしく残酷そのものの寒い冬の中で旅を続けて行った。病気になった人、そして、死んでいった人々は、旅の途中で道に沿って埋葬された。旅は、とりわけ、女達と子供には大変な苦勞を強いた。彼らが辿った道は、“彼らが泣き叫んだ道”そのものだった：ずっと厳しい苦痛の涙の街道だった。

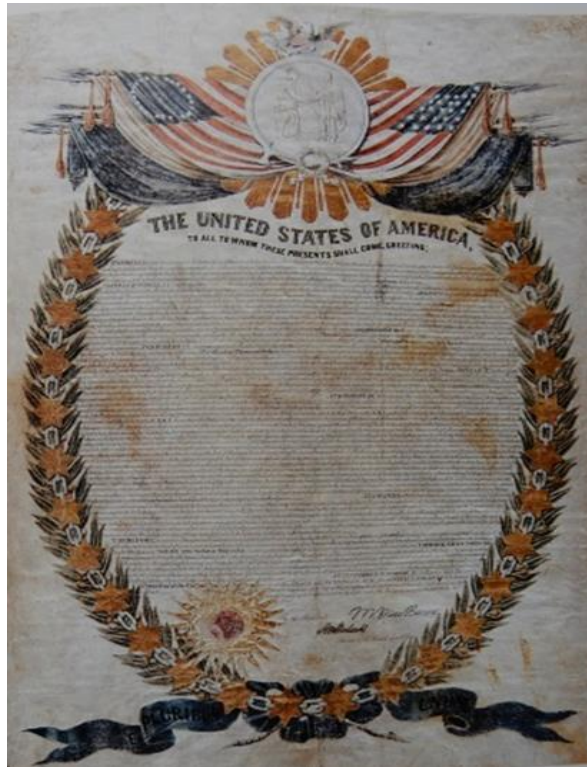
The Trail of Tears

by Robert Lindneux, 1942

わたしは、子供の頃遠くから白人を見て、そして、彼はわたしの敵だと言われた。私はオオカミや、熊を撃つように彼を撃つことはできなかったが、それでも、彼は、私のところにやってきた。

私の馬も、畑も彼は、私から取り上げた。彼は、私の友達だー彼は、私に友好の証に彼の手を差し出した。私はそれを取ったが、彼はもう一方の手にヘビを握っていて、彼の舌は分れていた。私は、フロリダを永久に離れるところだった。そして、面目を失うものは何もしなかった。それは私の家だった；それを私は愛していた。そして、そこを去ることは、私の妻と子供を埋葬するようなものだ。

COACOOCHIEE (Seminole), 1858



1828年5月6日、1833年の2月14日、そして、1835年の12月29日の協約と連結された形の、1838年に、大統領Martin Van Burenによりサインされた公用地譲渡証書のこの手紙は、チェロキー族の統治国に対してアメリカ合衆国からの“贈り物”として、アーカンサス州の14百万エーカー何某からなる領地の二つの条項、“耐える事の無い西部への出口と西部の境界地域からさらに西の領域全てを自由に、そして、何の制限もなしに使う事の出来る……領有すべきであり……全ての権利、それに、永久にチェロキーの統治国に属する……”と言ったものが付随しているが、この条項をもたらした。

こうした土地に対する肩書を許容する協約は、侵害されることなく残っていた。その協約は、合衆国が役所、軍事的な道路、そして、チェロキーの統治国のどこにでも砦を、建設し、また、同様に補修するとき、必要なときにはいつでも、“多くの土地、材木、燃料、そして、ありとあらゆる材料を、自由に使用することが出来ることと同様、これを設立する権利を保持している”という条項が含まれていた。

WILLIAM APESS

インディアンの強制退去が推し進められ、そして、インディアンの力が弱まって行くと、白人アメリカ人は、インディアンの人種的な劣等性と白人の優秀性を主張するようになった。白人たちは、神のお気に入りであること、宿命、そして、歴史を公告した。しかし、非白人の声もまた、人種の言語を採用した。

William Apossは、彼の両親は、肉体労働者であったが、彼はピクォット族のインディアンであった。彼は、ニューイングランドの、インディアンの人達がほんの周辺地域に残った社会に住んでいた。彼の両親からは見捨てられ、彼の良く酔っ払っていた祖父からは酷使され、鞭打たれ、そして近所の白人のところに契約書により年季奉公に出されていたが、彼は酒を飲むことになり、これを克服していた。彼は、かれ自身の破壊された過去から決して逃げようとはせず、逆に、その上に立ち上がり、そして、他のものと結び付けて、それを武器にしようと考えた。彼は、キリスト教徒になり、そして、メソジスト派の牧師となったが、しかしながら、彼は、彼のインディアンとしての強い自覚を維持し、そして、彼は、Cape CodのMashpeeのインディアンの街に住むようになった。1833年に、彼は、読み書きのできるキリスト教徒のインディアンとして、白人の聴衆たちに当てて、文書で次のような文を提出した。

いま、私に、白人であるあなたに訪ねさせてください。神のことを考えながら、食べたり、飲んだり、そして、眠ったりすることが、あるいは、それらと共に、座ったり、歩いたり、そして、話したりすることが恥さらしなのでしょうか。あるいは、白人は、15歳や16歳の人間である彼は、神のただ単に愛された姿であると考え様な愚行をするのでしょうか。あなたの想像の世界の中で、全ての国を一緒にするようにし、そして、白人の人達をその中に座らせてください。……。いまこそ、こうした肌の人達は、一緒だと考えてください、そして、それぞれの肌はその上に書かれた、国レベルの反道徳的な行為を背負っているのです。どの肌が、最も偉大だと考えますか？ 私は、今一つお尋ねしたい。あなた方は、彼らの全体の大陸のほとんどを一つの国として奪っている、そして、彼ら自身の女達、子供たちを殺していると、さらには、彼らの法的な権利、それは、大自然、そして、神が彼らに持つことを求めている権利ですが、それ権利に気づくことを奪い取っていると、インディアン達を責めることが出来ますか？ そして、度を越して、他の国を奪い取り、大地を耕し、そして、空腹と心身の疲れで、鞭打たれながら、日々、転げまわっている……。私は、全ての肌の人を見るべきだとおもうし、また、私が白人の肌に目を開いて見る時には、私は、その肌の上に刻まれたものを理解しようとするときには、私は、直ちに、それに対する私の不服の域に立ち入るべきであり、そして、もっと名誉のあるところに割り込んで行くべきだということを知っている。

チェロキー族とクリーク族の強制退去は、恐らく最も悲劇的なものであったが、しかし、1820年代から1830年代にかけて、ミシシッピ川の東側の主要なインディアン部族は、西部に移住しなければならないことを知っていた。貧相な選択を与えられ、彼らのうちのある者達は、これに反対し、ある者達は、自分の意思で移住し、また、ある者達は、監禁されて西に向かった。それは、計り知れない大変動であり、そして、全くの混乱の時であった。そして、彼らがそうであったように、その領地に入って行く入口は、さらに西に行こうとする人たちに占領されており、彼等を排除することが、大草原と大平原の地域に新しい部族間の対立の波を呼び起こした。強制退去は彼らの家を物理的に奪われた人達以上のインディアン達に多くの影響を与えていた。

オハイオ州を横切り、さらに北の地方の部族も、また、彼ら自身、多勢での移住、もしくは、白人たちに取り囲まれた、個人的に割り当てられた中で生活をするかの、選択を強いられているという事に気づいていた。何某かのとどまることを選ぶ人、小さなマイアミ族、ワイアンドット族、ポタワトミ族、そして、オタワ族の社会は、白人たちの海の中で生き残った。もっとたくさんの人達がミシシッピ川を渡って、故郷を離れて行った。さらに北のニューヨーク州の北の境界領域に沿って、北のシンガン州を渡り、そして、ウィスコンシン北部を横切り、イロクォイ族、メノミニ族、そして、オジブワ族が、強制退去の潮流に対し戦っていた。最終的には、彼らは、彼らのもとの領地のいくつかの残余を保護居留区として保持し、管理していた。そうした、ごく少数ではあるが、その成功例だけが、強制退去によりインディアンの人達に損害を与えた膨大な人間的荒廃を強調する助けとなった。強制退去の反対者達は、それが、連邦政府、州政府と、そして、膨大な数の市民の間の、襲撃を受けたインディアン達に対する狂暴であると見る事ができた。強制退去の支持者たちは、それは、インディアン達の最も都合の良い利益の中のものであると主張した。侵略者たち間の明らかに圧倒的な力に直面して、原住民アメリカ人達は耐え忍んできた。が、痛ましい程に、彼らの社会の再構築を始めた。オハイオ州の北から逃亡してきた人たちは、彼らの生活の再構築を始めた。彼らの西の地域にいた、勢力の強かった独立した部族は残ったが、しかし、インディアン達の生活の実態は、既に変わっていた。アメリカ人達が命令を下す力を持ち、そして、その力が、彼らの意思を押し付ける許容を持っていた。彼らが、大胆にも、1845年にテキサス州を併合したように、彼らは、もはや、ヨーロッパ人達が必要としたように、インディアンの人達を必要としなかったし、インディアンの人達も、自分たちが再登場を迫られる様な、その他のヨーロッパ人もいなかったのだ。

Thank you !

—RICHARD WHITE